

第四章 石桜同窓会のあゆみ

着々と育った組織

を果たした母校野球部の後輩たちを物心両面で全面的にバックアップ、これを契機に団結はいっそう強まり、活動は新たな盛り上がりを見せ始める。

同窓会の発足は三回生の卒業を間近かに控えた昭和八年二月。二十数名の発起人が母校に参集して発会式を挙行、同時に会則を制定した。四月には第三代校長決定の報を受け、ただちに佐々木哲郎新校長へ電報を打っている。「ゴフニンラマツ イワテチュウガクドウソウクワイ」

これが同窓会としての初仕事だった。

同年八月、余興に招かれた琵琶師・吉田旭蘭の演奏が彩りを添えるなか、母校において第一回の同窓会が開催された。このとき、参加者は

三〇余名、会員数（一回〜三回卒業生数）は約三〇〇名。以降、初代会長・工藤久吉（旧一回生）、第二代会長・松浦文彌（旧一回生）のもとで着々と組織は育ち、会員数が二〇〇〇を超えた昭和二〇年代には名実ともに同窓会の名にふさわしいエネルギーを持つに至った。

そして昭和三〇年夏、念願の甲子園大会出場

昭和三四年八月、第三代会長に就任した松見得明（旧一回生）は機関紙の発行を企画、総会の承認を得て、昭和三七年六月にタブロイド版二ページの「石桜同窓会報」創刊号が発行された。第三号からはページ数を四ページに増やし、号を重ねるごとに内容も充実、発行は平成七年までに二二回を数えている。そのバックナンバーを繰りながら、石桜同窓会の歩みをたどってみよう。どの紙面からも、母校を思う同窓生たちの心の温もりが伝わってくる。

節目節目で大きな成果

これまでの活動のなかでひとときわ輝きを放つのは、何と言っても昭和五十一年の母校創立五〇周年に際しての取り組みだろう。四〇周年時には記念事業として創立者の銅像を建立する計画



平成6年度石桜同窓会

が持ち上がったものの、「生前、義正翁は銅像を好まなかった」という事実が判明したこともあつて実現に至らなかつた。いまとなつては微笑ましいエピソードだが、その欲求不満(？)も手伝つて、五〇周年を同窓会一丸となつて盛大に祝おうという気運は早くから高まつていた。

昭和四八年の総会で創立五〇周年記念事業推進委員会の設置を決定、翌年には三年間で一億円を目標とする大募金運動をスタートさせた。

昭和五〇年には①記念同窓会の開催②美術展の開催③記念後援会の開催④記念誌の刊行を柱とした記念事業大綱を策定し、会員それぞれに手分けして具体的な準備を備えていく。

そして迎えた昭和五一年。一〇月二二日付けの岩手日報朝刊に見開き二ページをさいて石桜同窓会の記念広告を掲載、翌二三日を期して①③の記念行事が一斉に開催された。

南部会館を会場とする講演会ではわが国心理学界の第一人者・宮城音弥が「期待される人間像」の演題で講演し、聴衆に多大な感銘を与えた。また盛岡地区合同庁舎別館展示場では同窓の近藤一彦(旧17回生)の写真、佐藤裕司(新2回生)の彫刻、宇津宮功(新15回生)の絵画の合同展覧会が二五日まで開かれ、訪れた美術愛好家の眼を楽しませた。

庄巻は各年代の同窓生多数が顔をそろえて開かれた南部会館での同窓会総会とその後の懇親

会だった。総会では、母校の老朽化した校舎と施設の改善を訴える緊急動議が提出され、愛校心に溢れる満場の同窓生の共感を呼ぶ一幕も。

一億円募金も目標にこそ達しなかつたものの、三年間で一三六五万円余りが寄せられ、うち一〇〇〇万円を岩手奨学会へ寄付、同窓会のパワーが改めてクローズアップされることとなつた。

昭和五三年には約二〇〇ページにおよぶ充実した内容の『石桜五〇年史』が完成し、これをフィナーレとして記念事業の一切を終えている。

創立五〇周年事業について、昭和五二年の校舎炎上にもなう新校舎建設への支援でも同窓会の力は遺憾なく発揮された。すでに述べたように、老朽化した校舎の再建問題は昭和四〇年代より各年度総会でしばしば話題にのぼり、松見会長みずから三田義一理事長と面談してその意向の有無を尋ねるとともに、同窓会としても相応の負担の用意ありと伝える場面もあった。

それが焼失という思いがけないかたちで焦眉の問題となつたわけだが、同窓会はただちに校舎再建資金協力募金活動を展開、近代的な校舎に姿をかえての母校の再出発に大きく貢献した。

さらに母校創立六〇周年に当たつては、三田義清理事長が記念事業として計画し、その急逝によつて三田義之新理事長が引き継いだ校舎増築と体育館・プール建設に同窓会として呼応、昭和六二年五月より募金活動を行なつた。翌六三年三月までに目標額の三〇〇〇万円を大幅に

突破する四九六五万円余りが同窓生をはじめ卒業外教職員などから寄せられ、ここでも大きな成果を挙げている。

多彩な文化事業

もちろん、母校への経済的な支援だけが同窓会の活動ではない。母校の「今」を生きる後輩たちへの精神的な支援、母校が持つ優れた伝統や文化の継承、母校ゆかりの人材の研究、ひいては愛校心の高揚も同窓会の重要な使命である。

従来より毎年の同窓会予算のなかに「石桜会補助費」を計上して在校生の生徒会およびクラブ活動を援助してきたが、昭和五八年には成績優秀なクラブを同窓会長名で表彰する制度を導入した。現在も多くのクラブが表彰され、在校生と同窓生の一体感が醸成されている。

また、昭和六一年には同窓会とは別組織として「石桜振興会」が発足し、独自の立場からクラブ活動の援助や文化的事業への協力を行なうこととなつた。石桜振興会の運営資金は同窓生からの寄付によつて賄われ、これまでに母校各クラブへの補助のほか、「三田義正を語る会」や同窓の詩人・村上昭夫(旧15回生)の研究会の開催など多彩な活動を行なつていく。平成四四年には創立者の伝記『三田義正 人材育成と果断の事業家』を刊行した。

平成五年八月には、折りからNHK大河ドラマ『炎立つ』の原作を執筆中の同窓の作家・高橋克彦（新19回生）を講師に招き、石桜同窓会主催の文化講演会が県民会館大ホールで開催された。郷土を舞台とするドラマ執筆にまつわる裏話など盛り沢山の講演は会場を埋めた聴衆を魅了、講師を囲んで同夜開かれた記念パーティーも盛会で、実行委員会のメンバーを中心に同窓生の力を結集して運営されたビッグイベントは大成功のうちに終わった。

平成五年の総会では同窓会活動のさらなる充実を図るため、同窓会運営検討委員会の設置を決定。翌年には三五年間にわたって同窓会をリードしてきた松見会長が勇退し、赤坂俊夫（旧9回生）新会長にバトンを引き継いだ。

平成七年総会では、石桜振興会に代わって母校のクラブ活動の振興を目的とする特別委員会の設置案が可決され、同時に母校創立七〇周年に向けての取り組みが討議された。

早速八年一二月一三日第一回記念事業特別委員会を開催し、まず会場確保の關係から開催日《八年一〇月一九日》並びに会場《メトロポリタン盛岡ニューウィング》を選定し、委員会を七班《総会・祝賀会班、記念講演会班、芸術文化講演班、美術展班、記念誌刊行班、功績顕彰班、募金・広報班》に編成し、具体的検討に入った。委員は次の三四名である。

委員長・赤坂俊夫（旧9）

副委員長《三名》

鱒沢昇（旧13） 記念誌刊行班長兼務
藤原仁左衛門（旧14） 祝賀会班長兼務
村井紀之（新18）

功績者顕彰班長・大志田武（旧12）
記念講演会班長・武藤正吾（新14）

芸術文化公演班長・中村光紀（新10）

美術展班長兼務

募金・広告班長・下河原善嗣郎（新5）

教頭・山岸道利 大坪幸平（旧17）

山口徳治郎（旧18） 村上照五郎（新2）

菊地 清（新3） 田中義男（新8）

後藤康文（新8） 竹花国夫（新8）

小枝指博（新9） 八重樫昭（新12）

黒沼芳朗（新13） 越戸国雄（新16）

二上憲育（新17） 小山田舜次郎（新18）

難波保夫（新19） 桑原伸行（新22）

佐藤英也（新22） 畑澤昌美（新24）

井上成一（新24）

事務局 教頭・菊地治雄 菊池軍次

武田真和 川村康二、和田健一郎

明けて八年一月早々から、各班はそれぞれ協議を重ねて最終結論が出されたのは、四月二十六日の第三回記念事業特別委員会であった。

一、記念事業の概要

(1) クラブ強化育成基金の設定

(2) 石桜七〇年誌の刊行

(3) 記念祝賀行事開催

二、募金目標額 三、〇〇〇万円

三、予算の概要

(1) クラブ強化育成基金 二、三〇〇万円

(2) 石桜七〇年誌刊行費助成 四〇〇万円

(3) 記念祝賀行事費 三〇〇万円

《記念講演・功績顕彰》

☆募金について

(1) 平成八年六月〜同年八月末日

(2) 寄付金は一口五、〇〇〇円以上

◆寄付金三口以上の方には記念誌を進呈

(3) 広告は一〇五〇、〇〇〇円以上申込みの場合、

記念誌進呈とともに、別冊七〇周年記念事業広告欄に掲載とする。

◆寄付者並びに広告提供者の芳名を石桜同窓会報に掲載する。

☆記念祝賀行事について

一、日時 平成八年一〇月一九日（土）

(1) 石桜同窓会記念総会午後三時

(2) 記念講演 同四時〜五時三〇分

（講師の選定については後日検討することとした。）

(3) 功績顕彰・記念祝賀会 同六時

二、会場 ホテルメトロポリタン盛岡

新館「ニューウィング」

三、祝賀会費 六、〇〇〇円

☆記念誌のみ希望の場合

一部送料共六、〇〇〇円

なお、ここに功績顕彰について述べておく。

一、同窓会役員に対する感謝状並びに記念品
(校章入り木製レリーフ) 贈呈は次の三名とし
た・松浦文彌(旧一回)

《業績》昭和二五年七月(一九五〇)〜三四年
三月(一九五九)。九年間、同窓会二代目会長
を務めた。

・松見得明(旧一回)

《業績》昭和三四年三月(一九五九)〜平成
六年一〇月(一九九四)。三五年間同窓会三代
目会長を務めた。この間に母校創立五〇周年記
念事業、校舎再建への資金協力募金活動に尽力。

・栃内松四郎(旧一〇回)

《業績》昭和二九年(一九五四)〜平成六年
一〇月(一九九四)。同窓会副会長として松浦
二代目、松見三代目会長を補佐。この間に野球
部甲子園出場の際の後援活動、母校創立五〇周



速藤貫中前校長県勢功労賞祝賀会(平成4年10月30日)



平成7年度石桜同窓会

年記念事業、校舎再建への資金協力募金に尽力。
二、クラブに対する表彰状並びに奨励金(一〇
万円)の贈呈は次の三部とした。

・ソフトテニス部

《表彰理由》平成五年度〜八年度の四年連続イ
ンターハイ出場。六年度県高総体準優勝、七年
度新人大会優勝、七年度県選抜選手権準優勝、
八年度県高総体準優勝。

・テニス部

《表彰理由》平成六年度〜八年度の三年連続イ
ンターハイ出場。平成五・六年度新人大会優勝、
六年度県高総体優勝、七年度県高総体準優勝、
七年度新人大会準優勝、八年度県高総体優勝、
六年度〜八年度の三年連続県大優勝。

・物理部

《表彰理由》平成七年度科学技術体験活動アイ

ディアコンテスト(超電導実験)で科学技術長
官賞を受賞。超電導研究・プラズマの研究で、
日本学生科学賞平成六年度岩手県最優秀賞、七
年度優秀賞を受賞。八年度三月全米理科教師連
盟総会で発表。

思えば、昨年度の同窓会総会で記念事業骨子
が承認されてから具体案が出来るまで理事会・
常任理事会・特別委員会・小委員会で協議する
こと実に一五回に及んだのである。

会員数もほぼ一万三千人に達した今、石桜同
窓会の活動は新たな段階を迎えたと言えるだろ
う。

最後に、忘れてはならないのが地域・職域・
部活動・クラブごとに組織されている数多くの
同窓会の支部的活動の存在である。各支部の活
動状況は毎号の「石桜同窓会報」に「OB短信」
として掲載されているが、どんなに少人数であ
ろうとも、同窓生が集えばそれは立派な同窓会
活動なのである。同窓会報創刊号で、松見会長
はこう書いている。

「同窓会というものは何も会組織そのものだ
けを意味するものではなく、勿論会長以下役員
をもって構成されている執行部をさすのでもな
い。二・三人の集いであっても、それは同窓会
であり、母校について話し合ったり在学当時の
思い出を語り合うことも同窓活動の一つであり、
友の身の上を思いやるのも同窓愛の表れである」
むべなるかな。